

大納言道綱女豊子について

——『紫式部日記』成立裏面史——

久下 裕 利

一 はじめに

いっばんに凡庸とされる藤原道綱の道長政権下においての見直しは先行研究（伊藤博、坂本共展）を継いで前稿「^{注（１）}その後の道綱」において述べておいた。

その際道綱の子女たち、つまり本稿で取り上げる道綱の長女と思われる宰相の君豊子をはじめ、一男道命、二男齊祇についても言及した。

父母の名声とその秀英な子女たちの間に隠れる道綱を「二重に影の薄い存在」とする角田文衛の辛辣な酷評を尻目に、道長政権を支える影の存在としての道綱家の人々を照射し、大胆な憶測を交えての推論を展開しようとするのが、本稿の目的である。

二 『紫式部日記』のもう一つの意図

伊周、隆家ら中関白家一族の排斥に成功したものの左大臣道長は、一条天皇と定子中宮との間に有効なくさびを打ち込め得なかったが、長保元（^{九九}）年十一月一日、ようやく十二歳にすぎない彰子を一条天皇の後宮に入れた（日本紀略）。

しかし、寛弘五（^{一〇〇}）年の彰子所生敦成親王誕生までには道長は苦渋の選択を強いられることになる。というのも奇しくも長保元（^{九九}）年十一月七日、つまり彰子入内の同年同月、定子は一条天皇の第一皇子敦康親王を出産することになる。当分の間、幼い彰子に懐妊を期待すべくもないゆえ、円融系皇統を継ぐかけがえのない皇子誕生として、道長は国母詮子ともども受け入れざるを得ない現実であった。

だからといって、一条天皇の方も後見のいない第一皇子誕生を手離しで喜ぶ状況ではなく、執政者道長と折り合いをつけるべく、彰子立后への道筋をひらく。もちろんその実現には国母詮子と道長との意を体した蔵人頭行成の説得工作が必要だった。

それにしても相変わらず彰子の一条院内裏への形式的な参入しか後宮政策に打つ手がない道長に転機が訪れた。皇后定子の崩御（権記・長保二（^{一〇〇}）年十二月十六日条）に伴う、一宮敦康の処遇で、長保三（^{一〇〇}）年八月三日、敦康親王が中宮彰子の居所飛香舎（藤壺）に移御し、敦康は彰子の猶子に迎えられた。以後道長が後見役を果たすようになり、道長と一条天皇との軋轢が表面上解消した。ただ伊周の復権もあり、不安要因が全て取り除かれた訳ではなかった。

また長保三(二〇二)年十一月十八日には、一条院内裏が焼亡し、温明殿が火元近くであったため、賢所に奉置してある神鏡まで焼失してしまうという災事が出来た。そして同年閏十二月二十二日には東三条院詮子が院別当でもあった行成邸で崩御した。享年四十歳であった。一条天皇の即位に関わる母后詮子は、寛和二(九六)年六月二十二日の花山院退位事件(扶桑略記)以来、長徳の変と激動の時代を生き、実弟道長政権擁立とその体制作りに労をいとわず支援した。

因に、紫式部が十七歳の彰子のもとに初出仕したのは、寛弘元(一〇〇四)年十二月二十九日と推定されるから、詮子没後既に三年も経っていた。しかし、寛弘五(一〇〇八)年七月中旬ごろからの記述で始まる『紫式部日記』^{注(3)}にもいまだ詮子の影響の残滓が揺曳しているらしいのである。

ひとまず『紫式部日記』の秋色深まりゆく中で中宮安産祈願の読経の声々が響きわたる土御門邸を描く冒頭(イ)とそれに続く道長・頼通父子登場場面(ロ)及び三の宮敦良親王の五十日の祝儀を描く末尾(イ)を掲げておく。

(イ)秋のけはひ入りたつままに、土御門殿の有様、いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりのくさむら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶なるに、もてはやされて、不断の御読経の声々、あはれまさりけり。(略)さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。人々まゐりつれば、夜も明けぬ。
(一三三〜五頁。傍線筆者、以下同様)

(ロ)渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうききりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。(略)しめやかなる夕暮に、宰相の君と二人、物語してゐたるに、殿の三位の君、簾のつま引きあけて、ゐたまふ。(略)うちとけぬほどにて、「おほかる野辺に」

とうち誦じて、立ちたまひにしさまこそ、物語にはめたるをとこの心地しはべりしか。
(二二五〜六頁)

(イ)その日の人の装束、いづれとなく尽したるを、袖ぐちのあはひわろう重ねたる人しも、御前のものとり入るとて、そこらの上達部、殿上人に、さしいでてまばられつることぞ、後に宰相の君など、口をしがりたまふめりし。さるは、あしくもはべらざりき。ただあはひのさめたるなり。(略)

主上は、平敷の御座に、御膳まゐり据ゑたり。御前のもの、したるさま、いひつくさむかたなし。簀子に、北むきに西を上にて、上達部、左、右、内の大臣殿、東宮の傳、中宮の大夫、四条の大納言、それより下は、え見はべらざりき。
(二二〇〜二頁)

掲出本文を最低限にとどめたため恣意的な部分引用と批判されかねないが、中略箇所があっても(ロ)(イ)いずれも同場面や同日の出来事で、傍線箇所「東宮の傳」が道綱、「宰相の君」が長女豊子、「さいさ阿闍梨」が二男齊祇^{注(4)}である。

このように『紫式部日記』の冒頭部と結末部に主要な道綱家の人々が出揃うことになる。(イ)齊祇については、萩谷『全注釈(上)』(五七〜六一頁)が説くように、当夜の五壇の御修法に際し、師父である大阿闍梨勝算が加持物を寝殿へ持参する間、最年少(二十六歳)で最下臈であった齊祇は、退出せずに担当の西壇大威徳明王の前にひざまずいて頭を垂れたまま陀羅尼を唱え祈念している姿を捉えている。最下臈の凡僧に紫式部の目がわざわざ注がれたのは他ならぬ齊祇阿闍梨が宰相の君豊子の兄弟であったからということになる。齊祇は、長元六(一〇三三)年に当夜の効験で安産で生誕した敦成すなわちのちの後一条天皇の護侍僧と為っている。

また『日記』結末部(ハ)は、寛弘七(一〇〇)年一月十五日の敦良親王五十日の祝儀における東宮(居貞親王のち三条天皇)の傳大納言道綱の点出で、南側の簀子に北向きに居並ぶ公卿のひとりとして左大臣道長以下順当に着座していて、道綱を取り立てて描出したというとした訳ではあるまいが、宰相の君の衣装の配色に言及した後、紫式部はわざわざ同僚女房の「大納言の君、小少将の君ゐたまへるところに、たづねゆきて見る。」(二二二頁)と、その視界を確保している。ここは枇杷殿内裏なのである。^{注(6)}

ただ最末尾の管絃の遊びの後に、酔った右大臣顕光が「ざれたまふめりしはてに、いみじきあやまちのいとほしきこそ、見る人の身さへひえはべりしか。」(二二二頁)と、見るものまで冷やんとさせるほどの大失態を演じたことがことさら記されている。『御堂関白記』(大日本古記録)同十五日条裏書に拠れば、「右府御前物見間、欲取御窪器物盛鶴間物、折敷打こほせり、衆人奇々事無極、非可取鶴、何物打覆哉、無心又無心」とあって、天皇の豪華な御膳に鶴の置き物に添えて盛りつけた窪器のものを取ろうとして折敷(木製の盆)に手をついたため壊したようなので、道長は呆れているのであろう。顕光は官人としての責務履行能力に劣り、公事において失儀、失態が多く、その点道綱とは同類で嘲笑、罵倒の事例が『小右記』にも数多く挙げられている。^{注(7)}

ところで、三の宮敦良の誕生は、寛弘六(一〇〇九)年十一月二十五日であって、その寛弘六(一〇〇九)年の実録の記事は、周知のように「このついでに」(二八九頁)以下のいわゆる消息体部分にとって代わり、何らかの理由で欠落するが、敦良親王生誕を記すことなく、五十日の祝儀のみを記述して当『日記』の結尾とする意図は別に考えておかねばならないことは言うまでもないが、副次的にでも道綱家の人々を、その視界に収めた記事で締

め括ることの意義は推してしかるべきであろう。その意義を考えるにあたって、さらに二の宮敦成の五十日の儀を対照しておくことも必要となる。寛弘五(一〇〇八)年十一月一日、敦成親王の五十日の儀は、土御門第において中宮御前で執り行なわれた私的な祝宴となっていて、中宮彰子の陪膳役は「宰相の君讃岐」(二六二頁)、つまり道綱女豊子が務め、「若宮の御まかなひは大納言の君」(二六二頁)であった。^{注(9)}そして「殿、餅はまゐりたまふ。」(二六三頁)とあり、外祖父道長が手ずから若宮の口に餅を含ませる儀式を行なっている。その後の酒宴では公卿たち(右大臣顕光、内大臣公季、中宮大夫齊信、右大将実資、左衛門督公任、侍從宰相実成)の乱れた酔態が活写されている。その中に道綱の姿は『絵詞』本文ともども確認できない。

それに対し、敦良親王の方では、父である一条天皇みずからが敦良に餅を含ませているし、『日記』では天皇を前にして三人の大臣たちの次に居並ぶ公卿のひとりにすぎない道綱が、『御堂関白記』同日条に拠れば、おそらく無難に天皇の陪膳を務めていることが知られるのである。^{注(11)}『日記』では単なる参列者にすぎない数ある公卿の一人という描出に作者の意図など窺い知られようはずもないとすれば、それまでだが、紫式部が内裏女房たちが居並ぶ中で、親近する同僚の中宮付き女房たちをわざわざ探し出し視座を確保し、宰相の君豊子からその父東宮傳道綱の姿を捉える営為は、道綱をクローズアップする記述はないにしても、あえて右大臣顕光の失態を描き入れることで、逆に道綱を照射できる手法であり、中宮賛美を挿入する冒頭部と天皇を配す結末部の設定操作に加えて、わずかながらもその連関性に作者の隠されたもう一つの意図(『道綱家の人々を記す)を嗅ぎとすることはできないのだろうか。

しかも久保朝孝が看破したように、管絃の遊びの有無を基に兄宮敦成五十日祝宴の記事は、公的↓私的展開をしているのに対し、弟宮敦良五十日祝宴の方は、私的↓公的視点での叙述記事に仕立てているのであり、^(注12)その対照的構図は、首尾呼応だけではなく、兄弟両親王の五十日祝儀に關しても『日記』は構造体として機能し、生成しているのだと言えよう。

三 宰相の君豊子と紫式部

『紫式部日記』の執筆意図が第一義的には、道長家の栄華の礎となる一大慶事の皇子誕生を記録することであったにしても、『日記』冒頭部の視点は、弟齊祇阿闍梨↓宰相の君豊子を捉え、また結末部は宰相の君豊子↓父東宮傳大納言道綱であって、とりわけ中宮彰子付きの上臈女房として参仕する宰相の君への注目度が高く、紫式部の関心の所在が明確にかたどられていると少なくとも言い得よう。

また構造体としての『紫式部日記』に方法的な歴史叙述が選びとられていることは、『紫式部日記』敦成親王関連記事を資料とした『栄花物語』(巻八「はつはな」)との比較対照でさらに明確化できようが、定子・伊周方との対立軸を基点とする歴史叙述にむしろ『栄花物語』の特性が明示されれば、また『紫式部日記』の私的な女房日記としての特性も逆照射されよう。むろんそれが宰相の君関連の上述の指摘箇所が削除されている点の確認にすぎないのではなく『栄花物語』の歴史叙述方法としてあくまで除外されているのであって、宰相の君ひとりのみが省筆の対象では決してないことは留意しておかねばならないだろう。ここで一例を挙げておけば、中宮彰子が出産直前に物の怪に苦しめられる記事の前に置かれる寛弘五(一〇〇)年八月末から九月初旬にかけての件りである。

『栄花物語』巻八「はつはな」

^aこのごろ薰物合せさせたまへる、人々にくばらせたまふ。御前^bにて御火取ども取り出でて、さまざまを試みさせたまふ。かかるほどに九月にもなりぬ。長月の九日も昨日暮れて、千代をこめたる籬の菊ども、行く末はるかに頼もしきけしきなるに、よべより御心地悩ましげにおはしまししかば、夜半ばかりよりかしこましまでのしる。^c十日はのぼのとするに、白き御帳に移らせたまひ、その御しつらひかはる。
(新編全集①四〇〇頁。傍線筆者)

当該引用箇所に対応する『紫式部日記』は、次の如くである。

^A(二十六日、御薰物あはせはてて、人々にもくばらせたまふ。まろがしゐたる人々、あまたつどひゐたり。上よりおるる途に、弁の宰相の君の戸口をさしのぞきたれば、昼寝したまへるほどなりけり。萩、紫苑、いろいろの衣に、濃きがうちめ心となるを上に着て、顔はひき入れて、硯の筥にまくらして、臥したまへる額つき、いとらうたげになまめかし。絵にかきたるものの姫君の心地すれば、口おほひを引きやりて、「物語の女の心地もしたまへるかな」といふに、見あけて、「もの狂ほしの御さまや。寝たる人を心なくおどろかすものか」とて、すこし起きあがりたまへる顔の、うち赤みたまへるなど、こまかにをかしうこそはべりしか。おほかたもよき人の、をりからに、またこよなくまさるわざなりけり。九日、菊の綿を、兵部のおもとの持て来て、(略)その夜さり、御前にまゐりたれば、月をかしきほどにて、はしに、御簾の下より、裳の裾などほころび出づるほどほどに、小少将の君、大納言の君など、さぶらひたまふ。御火取に、ひと日の薰物とうでて、こころみさせたまふ。^C(略)十日の、まだほのぼのとするに、御しつらひかはる。白き御帳にうつらせたまふ。
(一二八〜一三〇頁)

『紫式部日記』を資料とした検証は『栄花物語』との文対応（傍線箇所A―a、B―b、C―c）で、その表現の一致からも受容関係は明らかだが、その中で「弁の宰相の君」^{注13}に関する省筆も際立っている。宰相の君の昼寝の姿態、その容貌の美しさを「絵にかきたるものの姫君の心地」「物語の女の心地」として巧みな比喻により抽出するとともに、上臈女房への式部の悪戯であっても許容される親密性が特出される場面となっている。いたい紫式部は宰相の君とどのような関係性を築こうとしているのだろうか。前掲(回)では「しめやかなる夕暮に、宰相の君と二人、物語してゐたるに、殿の三位の君、簾のつま引きあけて、ゐたまふ」と、「殿の三位の君」つまり頼通を道長の嫡子として定位するのが主たる意図であって、頼通はその場から立ち去り際に「おほかる野辺に」と口ずさむが、それは「女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」（古今集、秋、小野美材）の第二句であった。すなわちこの場面が、早朝の道長との「女郎花」^{をみなへし}をめぐる式部との和歌のやりとりを受けての連続性と対比構図によって描出されているところからすれば、この場に宰相の君と二人して居たこととの状況設定は、掲出本文(二)の宰相の君との戯れの場面展開への布石となっているはずで、宰相の君の美しい容態を「絵にかきたるものの姫君の心地」「物語の女の心地」とする形容も、嫡子頼通を「物語にほめたるをとこの心地」とした前提での反映として解釈する必要があつて、その対照をまるで物語的世界の再現を「憂き世」の現実に見出し得る賛美の手法として作者が描いているばかりではなく、中宮彰子の従姉である宰相の君を道長家のミウチとして定位するための方法として、実はその形容があつたのではないかと考えたいのである。

ところで、中宮彰子付きの上臈女房としてその筆頭に宮の宣旨や宮の内

侍がいる中で、紫式部は親密な関係を形作る女房に宰相の君、小少将の君、大納言の君という三人を取り上げて、当『日記』中にそれぞれ順に十六回、十四回、十回と登場させている。^{注14}このような三女房の過度な登場傾向は、必ずしも中宮に近侍伺候する頻度や儀式における奉仕役割の相異によっているわけではなさそうである。

小少将の君は源時通の娘であり、大納言の君は源扶義の娘であつたから、時通や扶義は道長の正妻倫子の兄弟であつて、その娘は姪ということになり、倫子からすれば、同じ彰子の従姉妹といつても父道長方の縁戚の宰相の君とはその気心や信頼性を問えば、不安が残る点もあつたかと思量されなくもない。さらに『日記』内で、小少将の君と大納言の君は福家氏が前掲論考で明らかにしているように、和歌の贈答を含めて憂愁叙述に関わり、紫式部の孤愁に響き合う心の友としてその存在性が『日記』に定位されているといえよう。

それに対し、登場頻度の最も多い宰相の君との関係では心の交流を描くことはなく、彼女の衣装や容貌に関する記述に終始しているのである。^{注15}その一例として挙げるのは、寛弘五（一〇〇六）年十月十六日、土御門邸行幸当日、一条天皇が誕生した若宮敦成と初めて対面する場面である。

(外)殿、若宮抱きたてまつりたまひて、御前にゐてたてまつりたまふ。主上抱きうつしたてまつらせたまふほど、いささか泣かせたまふ御声いとわかし。弁の宰相の君、御佩刀^{みはかし}とりてまゐりたまへり。身屋^{もや}の中戸より西に、殿のおおはするかたにぞ、若宮はおはしまさせたまふ。主上外に出でさせたまひてぞ、宰相の君はこなたに歸りて、「いと顕証に、はしたなき心地しつる」と、げに面うちあかみてゐたまへる顔、こまかにをかしげなり。衣の色も、人よりけ

に着はやしたまへり。

(二五七頁)

母屋の御簾内のことで式部の視界が及ぶわけでもなく、若宮の泣き声を耳で捉えての判断であろうことは止むを得ないが、若宮を抱く天皇や道長よりも若宮の守り刀を捧持する宰相の君の方に関心が注がれている。

女房による女房のための日記とすれば無理からぬこととはいえ、恥じらい故か顔を赤らめた宰相の君の美しさは、前掲(二)の昼寝姿の場面でも同じく「こまかにをかしうこそはべりしか」とあって、その評言は決して非難とはならない。しかし、舞台裏の表情とはいえ、頼りがいのある風格を漂わせる上臈女房とはとても言い難いし、ただ外見の軽薄な美しさだけがその衣装とともに強調されているにすぎないのである。まるで新人のようにもの慣れない体が宰相の君の実像であったのかどうか。小少将の君や大納言の君とは全く異質な描かれ方をしているのであって、この三人を式部にとって親密な関係ゆえ一括りにして、その位置付けをすることが可能なのかどうか躊躇せざるを得ないのである。

既に掲出した本文によって知られるように、宰相の君の女房名は当『日記』中では時に「弁の宰相の君」と記されたり、「讃岐の宰相の君」(二三二頁)と呼称されたりするが、これらが同一人物との判断は、寛弘五(一〇〇〇)年九月十一日に誕生した敦成の御湯殿の儀に関して『御産部類記』所引『不知記』に「御湯殿奉仕、清通朝臣妻名弁宰相」とあり、夫大江清通が讃岐守であったゆえ、「弁の宰相の君」ともあるいは「讃岐の宰相の君」とも指呼されているとの判断が成り立つこととなろう。もとより掲出(二)の本文により御佩刀を捧持した「弁の宰相の君」と、その役割を果して、式部たちの居る東の廂の間に帰ってきた「宰相の君」は、同一文脈上から同

一人物と考えられるから、「宰相の君」との表記は「弁の」という冠称を省いた呼称として通例『日記』では用いているのだと考えることができよう。

なお、「このついでに」(一八九頁)以下のいわゆる消息体部分に登場する「宰相の君は、北野の三位のよ」(一八九頁)は、参議藤原遠度の娘であつて、明らかに別人と認識でき、そう『日記』に記述されているから、本稿では考察外とするが、それでも「宰相の君」を道綱女豊子とした場合、その呼称に「弁の」を冠する意図が不明なのである。というのは、豊子の父、夫、兄弟などの近親者に弁官を補任した者がいないとなると、官職名からの由来となる「弁の」が不詳となり、「宰相の君」である豊子の実体把握に不明な点があり、その女房名にはいまだ疑問が残ってしまうのである。

さて、その疑問点については後述することとして、ここではさらに「宰相の君」と紫式部との関係について検討していきたい。再び敦成五十日の祝儀の場面を取り上げることになるが、酔って羽目はずす公卿たちの中で、式部はめずらしく右大将藤原実資に話しかけたり、逆に左衛門督藤原公任に「あなかしこ、このわたりに、わかむらさきやさぶらふ」(二六五頁)と、からかわれたりしていた。そうした宴の果てに次のようなことが起きた。

(二)おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、ことはつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東面に、殿の君達、宰相の中將など入って、さわがしければ、二人御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらせたまひて、二人ながらとらへ据ゑさせたまへり。「和歌ひとつづつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはず。いとほしくおそろしければ聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば「あはれ、仕うまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせたまひて、いと疾

うのたまはせたる、

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ

さばかり酔ひたまへる御心地にも、おぼしけることのさまなれば、いとあはれに、ことわりなり。

(二六五―六頁)

若宮祝儀の酒席で盃がまわれれば、参列する公卿たちは賀歌を献上するのが慣例だが、この祝儀に記された和歌は紫式部と道長とのこの唱和だけであった。主人道長が、煩を避けて隠れていた式部と宰相の君を二人ながら引き据えて、和歌を所望されたがゆえの式部の「いかにいかが」歌の詠出であった。「和歌ひとつづつ」との仰せであれば、宰相の君の詠進も当然あってしかるべきだが、詠まれずにこの場は収束したのか記されていない。そこで『絵詞』本文は「和歌ひとつ」であり、『栄花物語』（巻八「はつはな」）も「歌一つ」（①四二二頁）となってしまうのであろう。では宰相の君の立場、存在理由は何であったのかを問ねばなるまい。これでは式部にだしにされて奥へとただ引きずり回されているにすぎないということになってしまふ。しかし、むしろそこに式部の意図があったのかもしれないのである。『蜻蛉日記』の作者を祖母にもつ宰相の君豊子に歌才がなかったと言ひ難く、この場面での道長と式部の息の合った掛け合いこそが若宮の将来の繁栄を言祝ぐ歌の内容よりも眼目であったということであり、宰相の君がここに居てこそ式部が中宮彰子サロンの文芸的傾向が和歌的世^{注19)}界であり、それを領導していくことを見せつけることが可能であったという^{注18)}ことであらうか。

『日記』冒頭部に付置された「女郎花^{をみなへし}」をめぐる道長との私的な和歌贈答でその当意即妙な歌才を試され開幕する『日記』が、いまや最高権力掌

握を保証する若宮祝儀の最終場面に御帳台近くに座しているはずの中宮彰子とその母倫子が聞こえる間近で公的な賀歌を道長との間で集約する式部と、あたかも疎外されているかのように賀歌を詠まなかった宰相の君が、中宮彰子とその母倫子との輪の中にミウチとして存在し、式部によって組み込まれていることに気づくべきであらう。道長の自詠に対しての「われぼめ」（二六六頁）と「母もまた幸ひあり」（二六七頁）と言ひ放つ有頂天の仕儀が倫子を怒らせたのか、この場から立ち去っていき、あとを追う道長を写し出してこの場面が閉じられている。

式部と親しく交わる宰相の君は、小少将の君や大納言の君が『日記』にその詠歌が記しとどめられているのに対し、彼女は一首も『日記』にその詠歌を残すことはないのである。そうした宰相の君の位地は、既に十一日の暁、出産をひかえ北廂の間に彰子は移り、道長は御座所の傍にいた多くの女房たちを彰子の近くから遠ざけた場面で既に明らかになっていた。

(ト)人げ多くこみては、いとど御心地も苦しうおはしますらむとて、南、東面に
出ださせたまうて、さるべきかぎり、この二間のもとにはさぶらふ。殿の上、
讃岐の宰相の君、内蔵の命婦、御几帳のうちに、仁和寺の僧都の君、三井寺
の内供の君も召し入れたり。殿のよろづにののしらせたまふ御声に、僧もけ
たれて音せぬやうなり。

いま一間にゐたる人々、大納言の君、小少将の君、宮の内侍、弁の内侍、中務の君、大輔の命婦、大式部のおもと、殿の宣旨よ。いと年経たる人々のかぎりにて、心をまどはしたるけしきどもの、いとことわりなるに、まだ見たてまつりなるほどなけれど、たぐひなくいみじと、心ひとつにおぼゆ。

(二三―三頁)

宰相の君は、「殿の上」つまり倫子の次にその座を占め御几帳の内で彰子を見守るのである。次の間に控えるのが、大納言の君、小少将の君以下の「いと年経たる人々のかぎり」であって、宰相の君は古参の女房としての立場をも超越してミウチとしての待遇を受けていたのだと言えよう。宰相の君の次に控える「内蔵の命婦」は大中臣輔親の妻で道長の五男教通の乳母だが、こうしたお産の現場に慣れた女房として産婦の状態を見守る必要から特別に几帳の内に招き入れられたのだと判断されるから、宰相の君の破格の位地とは異なるとみられる。

ここではいまだ式部にとって中宮彰子は「まだ見たてまつりなるるほどなけれど」であったのだが、若宮五十日の祝儀ではその酒宴の狂騒にまぎれて式部は宰相の君を伴いまんまと中宮彰子の居る御帳台に接近し得ていたのであった。

四 敦成・敦良両親王の乳母

宰相の君豊子に関して最も重要な事項を遅まきながら明らかにしておけば、寛弘六（一〇〇六）年十一月二十五日に誕生した弟宮敦良の乳母であったのであり、それは次のような史料で確認される（傍点筆者）。

○『御堂関白記』寛弘六（一〇〇六）年十一月二十五日条

共御湯宰相乳母傳女、向湯宰相三位遠度女子、侍長等奉仕、

○『御堂関白記』寛仁二（一〇二〇）年三月二十七日条

参内、東宮熱物今日頗宜御座、退出、参中宮、行土御門、一夜漏女方等送女装束三具一具、綾掛・袴一具宰相乳母許、

○『小右記』寛仁四（一〇二〇）年九月二十日条

道綱卿道綱卿從昨日不覺、只今欲殞命之由、告送宰相乳母傳女許女也

寛弘六（一〇〇六）年十一月二十五日に誕生した弟宮敦良の湯殿の奉仕を務める「傳女子」豊子が「宰相乳母」と表記されていて、これが史料的には嚆矢で、兄宮敦成の湯殿での奉仕も『日記』（一三八頁）では宰相の君豊子だったのだから、その時点で兄宮敦成の乳母であって、『御堂関白記』にも弟宮敦良の時と同じ記載があったならば、遠度女と同じ「宰相の君」の女房名表記を用いずに、遠度女と区別する呼称表記として「宰相乳母」を採る選択肢があったはずなのである。しかも掲出本文（い）は寛弘七（一〇〇七）年一月の弟宮敦良の五十日の祝儀で、前掲『御堂関白記』寛弘六（一〇〇六）年十一月の湯殿の儀より後だから、少なくとも弟宮敦良の乳母であったことは明らかなので、（い）の「宰相の君」の女房名表記を変更しないまでも、乳母らしさを加えた記述が『日記』に伴っていても不自然ではなかったはずだ。しかし『日記』は一貫して「宰相の君」の造形に呼称ばかりではなく乳母らしい役割やその権威付けをする記述を伴うことをしなかったのである。また前掲『御堂関白記』寛仁二（一〇二〇）年三月二十七日条の記載に関して新田前掲書には次のような説明をしている。

右の前日の廿六日に「東宮御脛有小熱給物」ということがあり、その翌日にはよくなったことへの賜祿であるから、東宮敦良親王の看病に当たったのが、「宰相乳母」であるという事実を表している。そうすると、敦良親王の生誕に際し、湯殿を奉仕したのが「宰相乳母」であるという前の例と併せて、道綱女豊子が〈宰相の乳母〉と呼称されることの内実は、弟宮敦良親王の乳母という意味である可能性も生じることになるだろう。なぜかといえば『紫式部日記』には、兄宮敦成親王の生誕当日の条に登場する「宰相の君」が、湯殿

の奉仕者であることは語られているのだが、乳母であるとは一言も述べられていない。「宰相の君」が道綱女豊子を指掌して動かないものとするならば、彼女は兄宮敦成親王の乳母ではなかった、ということにもなりかねないのである。

(五五九～五六〇頁)

つまり、宰相の君豊子に関して最も重要な属性である《乳母》という役目を『日記』は排除し抹消したということになるのであろうか。

しかし、もとより周知の事実として宰相の君豊子は兄宮敦成（のち後一条天皇）の乳母でもあったことは、後一条天皇の崩御（長元九（一〇三六）年四月十七日）に際し、素服を賜わるべき者として『左経記』長元九（一〇三六）年五月十七日条に挙げられた女房十八人の割書に「先藤三位、藤三位、江三位、菅典侍（已上御乳母）」と記され、その前文には乳母子と思われる伊予守章任朝臣、美作守定経朝臣、美濃守義通朝臣、右兵衛佐資任、前丹後守憲房と、計五人が挙げられている。この時点で乳母の一人が既に死没しているとみて、両者各々と付き合わせての詳しい考証が必要だが、ここでは省略して、当面の問題の検討を急ぎたい。まず「先藤三位」が宰相の君豊子であり、その子息が「美作守定経朝臣」であることは、『尊卑分脈』にも「大江清通妻 定経朝臣母」と、その母子関係が記され異論のないところで、定経が美作守となったゆえ宰相の君はのちに美作三位とも言われ天皇の乳母としての叙爵で女官の最高職として典侍そして従三位となるのが慣例であった。

『日記』では記されていない宰相の君豊子の乳母としての位地が、定経の誕生時期とも関わってどのような経緯をもって何時確定したのか。さらに五人の乳母子の存在からして、宰相の君豊子の他にも敦成親王には乳母

が任命されていたのだが、『日記』には登場しない乳母が居たということになる。なぜならば、『日記』には敦成誕生当初、乳母として「もとよりさぶらひ、むつまじう心よいかた」（一三七頁）との評価で「大左衛門のおもと」が選ばれ、その後敦成五十日の祝儀当日の夜、「少輔の乳母」が新たに選任されたらしく、この二人だけしか乳母が挙げられていないからである。宰相の君豊子以外に残る二人の乳母も何故『日記』にその名さえ記されることなく排除されたのか、いまのところ不明なのである。

ともかく『日記』に記される「大左衛門のおもと」と「少輔の乳母」について検討しておくと、前者「大左衛門のおもと」は、橘道時の娘で藏人右少弁藤原広業の妻であった中宮女房で、その選出基準は前掲の通り明確で、古参でありながら気立てが良いとの理由で早くから乳母に決定されていたのであろう。

これに対し、後者は『日記』に「今宵、少輔の乳母、色ゆるさる。ただしきさまうちしたり。」（一六二頁）とあり、親王の乳母として今夜初めて禁色の着用が許されたと判断され、その緊張した様子が強調されているとみたい。というのも宮内庁書陵部蔵黒川本の本文は「たゝしき」だが、五島本『絵詞』本文は「こゝしき」とあり、その誤写の可能性が考えられるからである。萩谷『全注釈』も「ここでは、少輔の乳母の年齢的な若さと、禁色を聴かれて晴れがましさに緊張しているのであろう心理状態とよりして、「大人大人し」の反対語たる「児児し」の第一義に従って解釈するのが妥当であると判断する。」（四五三頁）とするのに首肯できる。

さらに『栄花物語』（巻八「はつはな」）では、当該本文が「讃岐守大江清通が女左衛門佐源為善が妻、日ごろ参りたりつる、今宵ぞ色聴されける。」（①四一八頁）となり、何らかの事情で急遽呼び出され、乳母として正式に

当夜任命された趣が伝わり、その素姓が讃岐守大江清通の娘で、左衛門佐源為善の妻と記される。しかし、「源為善」は『御堂関白記』寛弘五（一〇〇）年十月十七日条裏書に「玄蕃亮」とあり左衛門佐ではなく、当時左衛門権佐（小右記、同年七月十二日条）であった橘為義の誤りと考えられる。

大江清通と橘為義とは、ともに道長の家司であり、「少輔の乳母」こと清通の娘大江康子（のちの江三位^{注(21)}）と為義との結婚は家格相当と言えるのに対し、受領層にすぎない民部少輔大江清通と大納言道綱女宰相の君豊子との婚儀は、角田前掲論考が「如何にも不自然に見える」と疑義をはさんだように不釣合いで、ここにも何らかの力が働いていたと考えざるを得ない。となれば、道長が物忌で身を寄せるほど信頼する腹心の家司であった大江清通と、想像するに弁官であった夫を亡くして実家に籠る^{注(22)}豊子に再出仕を要請するに及んでこの成婚を図ったとも考えたいところで、清通も前妻を失いちょうど身重か出産したばかりの娘が居て、若宮誕生に際して乳母にとの心積りが道長にあったのか、道綱女豊子の道長家への取り込みの方法として多少合理性に欠けるうらみがあるものの、この結婚を道長側から懇願したのかもしれないのである。

少輔乳母は豊子にとって年齢上から継娘となるとするのが萩谷『全注釈』^{注(23)}（二二頁）であり、その豊子を「敦成親王の湯殿を奉仕するために、道長が中宮彰子に再出仕させたのであろう」（五六三頁）とするのが新田氏の考えだが、とにかく宰相の君豊子は、定経生誕に絡み兄宮敦成に授乳可能な乳母であったのかどうかを不問にすまま、若宮の新任で若い乳母である少輔乳母を後見する母代としての立場が確保されるようである。補足するが大納言道綱女と受領層の大江清通との格差結婚が本質的な問題ではなく、将来天皇に即位する可能性がある敦成親王の主乳母の出自が問

われているのだと考えるべきであろう。

ところで、新田氏は「弁の宰相の君」と「讃岐の宰相の君」とが別人との認識を示し、後者が道綱女豊子とし、前記したように若宮誕生に際し再出仕を道長から要請されたと判断して、以下の『権記』の記述に関しても独自の見解を示している（傍点筆者）。

①寛弘四（一〇〇）年五月二十四日条

今夕参内、候御前、於中宮上御廬逢弁宰相、令啓事

②寛弘五（一〇〇）年二月十七日条

参中宮御方、相逢宰相君

③寛弘七（一〇〇）年八月十一日条

参中宮御廬、被仰事伝弁宰相

①③は行成が内裏に居る中宮彰子に啓上する場合の取次者として「弁宰相」が登場し、②は「宰相君」とあって敬称をつけているので、①③の「弁宰相」とは別人とみて、遠度女と判断したのである（五三四頁）。ではいったい中宮に近侍する「弁宰相」とは誰なのかというと、菅原輔正女^{注(24)}芳子（頼任妻、右兵衛佐資任母）であるとした。つまり、前記した『左経記』での乳母の中に「菅典侍」とあった人物となるが、ただこのこと自体は角田文衛や萩谷『全注釈』^{注(25)}（一〇八―一〇九頁）が明らかにしていることだが、新田氏は輔正女の兄弟に右中弁であった為紀の存在を指摘し、道綱女豊子が何故「弁の宰相の君」と呼称されるのかの根拠が不詳だったのに対し、史料に確認できる弁官の兄弟がいる菅原輔正女芳子の「弁の宰相の君」たる由縁を明らかにしたのであった（五二五―五三三頁）。そしてその初出仕を父菅原輔正が長徳二（九六）年四月二十四日参議に列せられる以降で、

しかも右中弁為紀が早世する長保四（一〇三三）年十一月十六日までの六年間とし、ならば長保元（九七〇）年十一月一日の彰子入内ないし翌二（一〇〇〇）年二月二十五日の彰子立后に合わせて彰子側近の女房として出仕したと想定している。ただ寛弘五（一〇〇六）年の敦成親王誕生時には、その三十余歳という年齢から必ずしも授乳のための乳母ではなく教育担当に重きを置いた任命ではなかったかとしている。

ここであらためて問題点を整理しておく、敦成親王の乳母に関して『紫式部日記』の道綱女豊子の「宰相の君」が乳母としての役割を付与されずに登場しているが、中でも「弁の宰相の君」と呼称され得る菅原輔正女が中宮彰子の側近として仕えているはずであるのに、別人格として描かれずに「弁の宰相の君」は「讃岐の宰相の君」と一体化し、その二重呼称を、ある場合は「宰相の君」に統合して記されている。こうした現象が何故起っているのか従来から疑問とされていたが、道綱女豊子に亡き先夫として参議で左大弁を経た源扶義を想定する角田説があるものの解決に至っていない。

実在した人物に関して作者の操作など加わるはずはないとする頑な幻想のためか、当『日記』の内実に目をそむけずに読めば、虚構に溢れたまさに物語作者の日記となっている。彰子に初めての男皇子誕生をみ、歓喜に湧く土御門邸とその主人道長の権勢の要となる親王の誕生を描く目的である『日記』執筆要請であれば、なおさらその若宮の生育にとって最も大事な乳母に関しての記述があいまいであるはずはないとの確信も、のちの史料との対照で書き分けられていないどころか、全ての乳母が記されているわけでもなかった。つまり実録日記としての体裁は根底から崩れていると言っても過言ではないはずだ。つまりこうした状況を踏まえれば、『紫式

部日記』を物語のような構造体として分析する視点と同時に、いま現実に起きている事件が時時刻刻と意図的に変容を加える媒体として作品に摂り込まれてくる流動的記憶体としての内実を当『日記』に問うべきかとも考えている。

ともかく実在の人物として菅原輔正女が存在し、しかも「弁の宰相の君」との名称で中宮彰子側近の女房として近侍していることが事実である以上、『紫式部日記』中で「讃岐の宰相の君」こと道綱女豊子の存在性を推し量ると、如上の検討を踏まえれば『日記』の冒頭部と結末部との結構を初めとして道綱女豊子の存在性の方が主体であることは明らかであって、長保年間以来長く近侍してきたらしい菅原輔正女の立場や役割をとって替わらせようとする作意が『日記』には展開されているとみられるのである。では何故そのような事態を招来させているのか、『紫式部日記』の中にただ一例、そのような状況転換を促す事件が描かれている。

前掲した(ト)の後文の場面で、産気づいた彰子を物の怪調伏のため数多くの修験者、僧侶、陰陽師たちが祈り、読経し、占い、安産を祈願するほどひどい難産の様子が『日記』に描かれている。そして頑強な物の怪のためなかなか調伏されずに大騒ぎをしたエピソードとして『日記』は次の出来事を記していた。

(チ)宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたれば、物の怪にひき倒されて、いといとほしかりければ、念覚阿闍梨を召し加へてぞののしる。阿闍梨の験のうすきにあらず、御物の怪のいみじうこはきなりけり。宰相の君のをぎ人にいひか叡効をそへたるに、夜一夜ののしり明かして、声もかれにけり。御物の怪うつれと召しいでたる人々も、みなうつらで、さわがれけり。 （二三五頁）

物の怪が駆り出されて憑依した憑坐を上臈女房の局に移して、それぞれ調伏させるに際しての悪戦苦闘のさまで、その最後の例に宰相の君の局を分担した「招ぎ人」叡効を捉えるのは、泣きはらし化粧くずれした宰相の君の容顔を「いとめづらかにはべりしか」（一三四～五頁）と記す紫式部の視点からすれば、順当な締め括りだとも言えよう。産婦彰子を苦しめる物の怪に対して安産を確保するためにも仕える者たちが、一致団結して一つ一つ不安を取り除いていかなければならなかったという出産時の顛末であった。

一方、『栄花物語』（巻八「はつはな」）では物の怪調伏に声をはり上げる験者の慌ただしさを写し出しながらも、正面から道長の不安や心配を付度する記述に転換している。

○いとあやしきことに恐ろしう思しめして、いとゆゆしきまで、殿の御前もの思しつづけさせたまて、ものの紛れに御涙をうち拭ひうち拭ひ、つれなくもてなさせたまふ。すこしものの心知りたる大人たちはみな泣きあへり。

（①四〇二頁）

○さて御戒受けさせたまふほどなどぞ、いとゆゆしく思しまどはるる。

（①四〇三頁）

中宮彰子は初産のためか相当な難産であって、仏の加護を祈って、仮に受戒までさせ、道長は自身で法華経を念誦している。『紫式部日記』を資料としたはずの『栄花物語』は親である道長に焦点を当て、「宰相の君」豊子を捉える紫式部の視界を排除し、その心情を切り捨てて、独自の展開に切り換えている。もとより両者に「弁の宰相」こと菅原輔正女は確認されない。

中宮彰子の側近の女房であり、しかも乳母ともなる菅原輔正女が、その主人の最も大事な出産に立ち合っていないことの理由に、内裏の留守居であったとか、病気で里居であったのだらうなどという事情で通るのであれば、『日記』の作意性は必要なく『栄花』のような方法での対応が可能となる。『日記』は意図するところがあって、「宰相の君」こと道綱女豊子をクローズアップさせているからこそ、上臈女房で以下続く御湯殿の儀等での菅原輔正女の不在をも顕著とせざるを得ないのであろう。

それでは、なぜ菅原輔正女は中宮彰子のお産に立ち合うことができなかったのか。彰子の傍には父道長ばかりではなく、いやもっと間近に母である倫子が付き添っていたことは前掲(ト)から確かであった。万が一にも不吉な事態になってはならず、細心の注意を払いあらゆる手を尽くして安産を祈願しているのである。そう判断できれば、菅原輔正女が存在自体に問題があったと言わねばならないだろう。

式部大輔菅原輔正は、北野天神菅原道真の曾孫なのである。一条朝では崇る神から守る神への転換が兼家流の人々によって、特に詮子などの意向によって計られるが、一抹の危惧をも払拭できているかは疑わしい。まして母源倫子からすれば、いかなる瑣末な不安でも、できる限り初産の娘の前から取り除きたいと願うはずであらう。

〈系図〉菅原道真 — 高視 — 雅規 — 資忠 — 孝標^{注(26)}
— 淳茂 — 在躬 — 輔正

しかも新田氏が『権記』で証明したように菅原輔正女は院別当であった行成の取次役であった可能性があるから、かつては詮子の意向を伝えたり、逆に中宮彰子の動向をつぶさに伝えたりする詮子とのラインが考えられる

中宮側近の上臈女房であった。

ところで、長保二(1000)年二月二十五日の彰子立后に際し、中宮大夫に補任されたのが大納言源時中(道長正室倫子の兄)であったが、その没後長保四(1003)年二月三十日(公卿補任)に中宮権大夫から転じて中宮大夫に拔擢されたのが新任の権中納言藤原齊信であった。^(注27)おそらく倫子の意向を反映しての人事であつたろう。『紫式部日記』にはその齊信と「宰相の君」豊子とが相対している場面がある。

(リ)事はてて、殿上人舟にのりて、みな漕ぎつづきてあそぶ。御堂の東のつま、北向きにおしあけたる戸のまへ、池につくりおろしたる階の高欄をおさへて、宮の大夫はゐたまへり。殿あからさまにまゐらせたまへるほど、宰相の君など物語して、御前なれば、うちとけぬ用意、内も外もをかしきほどなり。

(二三頁)

この場面は、「十一日の暁」から始まる寛弘五(1006)年五月の記事が混入したかとする説があり、そうとすれば敦成懷妊中のこととなるが、寛弘六(1007)年の某月十一日とみてもかまわないであろう。仏事が終わって道長が突然中宮方へ来たため、中宮大夫齊信の話相手を務めることになった「宰相の君」豊子を写し出す。齊信を相手とする「宰相の君」像は、行成を相手とする「弁の宰相の君」こと菅原輔正女とは明らかに違う人格として立ち現われていて、中宮の側近女房の位地を確実に占めていると言える。いまや中宮彰子は、ミウチの「宰相の君」豊子と、倫子からも信任をおく中宮大夫兼敦成親王家別当である齊信とに見守られ、穏やかな生活が確保されているようである。その上「御前なれば、うちとけぬ用意」とは、いかにもいまは大江清通の後妻におさまっている道綱女豊子と夫の上

司である齊信とが相対する時空が、異和感なくしっとりつつみ込まれていて、「内も外もをかしきほどなり」とは、御簾の内の父娘の機微と絶妙な主従関係の新しい構築をかいま見させていることになる。

五 東三条院詮子から道長正室倫子へ

東三条院詮子是一条天皇の母后で、初の女院となり長保三(1002)年閏十二月二十二日の崩御まで絶大な権力を誇った。『紫式部日記』寛弘五(1006)年現在、その影響力はどのような形で残っているのだろうか。紫式部の身にふりかかったエピソードが当『日記』に書かれてある。それは寛弘五(1006)年十一月十七日の中宮内裏還啓の記事である。以下当該場面を掲げる。

(ク)御輿には、宮の宣旨乗る。糸毛の御車に、殿の上、少輔の乳母若宮抱きたてまつりて乗る。大納言、宰相の君、黄金造りに、つぎの車に少少将、宮の内侍、つぎに馬の中將と乗りたるを、わろき人と乗りたりと思ひたりしこそ、あなことごとしと、いとどかかる有様、むつかしう思ひはべりしか。殿司の侍従の君、弁の内侍、つぎに左衛門の内侍、殿の宣旨式部とまでは、次第しりて、つぎつぎは、例の心々にぞ乗りける。月のくまなきに、いみじのわざやと思ひつつ、足をそらなり。馬の中將の君を先にたてたれば、ゆくへもしらずたどたどしきさまこそ、わがうしろを見る人、恥づかしくも思ひ知らるれ。

(二七二―二三頁)

いま簡略に乗る順番と同乗者を明示しなおすと次のようになる。

御輿―中宮彰子、宮の宣旨(源伊勢女陟子)

一の車―殿の上(道長正室倫子)、若宮(敦成親王)、少輔の乳母(大江清

通女)

二の車―大納言の君(源扶義女廉子)、宰相の君(道綱女豊子)

三の車―小少将の君(源時通女)、宮の内侍(源経房妻橘良芸子)

四の車―馬の中将(藤原相尹女)、紫式部(藤原為時女)

五の車―侍従の君、弁の内侍

六の車―左衛門の内侍、宣旨式部

第一に問題とするのは、四の車に乗り合わせた馬の中将の紫式部への過剰な意識と反応である。

「わろき人と乗りたりと思ひたり」の主語は馬の中将で、「わろき人」とは同乗者となった紫式部を嫌悪する心情の形象で、後文の馬の中将の「ゆくへもしらずたどしき」とした足どりのおぼつかさを、表面上は凡庸を装いながらも式部の冷徹な観察眼を過剰に意識したためと理会すれば、その緊張感ゆえのぎこちない動作から馬の中将の紫式部への意識を探り得よう。ただこうした従来の見解をさらに一步推しすすめて馬の中将の心情の内奥に迫ったのが福家氏であった。^{注(28)}

馬の中将の素姓は道長のもう一人の妻である高松殿明子の姪であり、中宮彰子を囲む女房集団にも嫡妻倫子に近い女房と次妻明子に近い女房との間に割り切れない感情が介在していたのではないかと考えられ、しかも倫子側にいる紫式部は『源氏物語』の作者であり、その主人公である光源氏の須磨明石流謫には菅原道真ばかりではなく源俊賢や明子の父で一世源氏である高明の太宰府への流罪が影を落としているのは明らかで、当時の享受者たちは身近にそのモデル探しをして楽しんでいた傾向があり、^{注(29)}あたかも高明が光源氏のような色好みゆえ配流の身となった事件があったのではないかと誤解されかねない書きぶりなのである。^{注(30)}それを明子に縁故のある

馬の中将が作者紫式部に対し厭う気持ちがあったとしても無理からぬことではなかったのかと福家氏は説くのである。

『源氏物語』の盛行が、安和の変での汚名に苦しむ源高明の親族にとつて、いつまでも風化されない現実を身を晒されていることの堪え難い心境が、馬の中将の意識や動作に代弁されている。この場面は、宮仕え女房たちが牛車に乗る順番においても、その集団での序列を鮮明にし、出自や職責での格差が思い知らされる渦中での特異な女同士の間関係の開陳となっていた。福家氏が馬の中将との反目の叙述を次のようにまとめている。

作者がむまの中将と同車が可能であったのは、作者が『源氏物語』で盛名を得ていたことと無縁ではなかったろう。実際の身分を超えて、作者が車に乗ったために、むまの中将は反発したと考えるのが、自然である。作者は『源氏物語』創作によって、主家に厚遇されていたのであり、上臈女房に次ぐ乗車はまさに『源氏物語』の余慶というものである。むまの中将が『源氏物語』に反発の思いを抱いていたとすれば、作者に対する主家の厚遇はおおよそ許しがたいものであったろう。

(二八六頁)

明子側に連なる馬の中将の感情的なしこりが現在の紫式部に対する主家の厚遇を照らし出すとすれば、『日記』とともに表面化している紫式部の立ち位地が倫子側に据えられる不快感を誘発してくるはずなのだが、それは将来勢力の対抗構図が明子腹の能信によって先鋭化してくるのはもう少し後のことで、むしろ女方で勢力図式を顕在化すれば、明子の背後にいた東三条院詮子をこそ問題にすべきであった。

そもそも中宮彰子を取り囲む女房集団に何故このような二極化現象が顕在化するのかという、繰り返すが道長政権樹立は一条天皇の母后詮子の

支援なくして成り立たなかった。道隆没後の権力移動に伊周方は一条天皇の皇后定子への寵愛を抛り所としていたが、伊周の政治能力に疑念を抱いていた母后詮子は強力に末弟の道長を推挙していた。その背景として、もう一つ詮子との関係性を象徴するのが、道長と明子との結婚であった。『栄花物語』（巻三「さまざまのよろこび」）がその二人の結婚事情を詳しく語っている。

いとど三位殿（道長―筆者注）は思しわくるかたなう、水漏るまじげにて過ぐさせたまふほどに、故村上の先帝の御はらからの十五の宮（盛明親王―筆者注）の姫君、いみじうかしづきたまへるは、源帥（源高明―筆者注）と聞えしが御弟姫君をとりて養ひたてまつりたまひしなりけり。その姫君（明子―筆者注）を后宮（詮子―筆者注）に迎へたてまつりたまひて、宮の御方とて、いみじうやむごとなくもてなしきこえたまふを、いづれの殿ばらも、いかでいかでと思ひきこえたまへるなかにも、大納言殿（道隆―筆者注）は、例の御心の色めきはむつかしきまで思ひきこえたまへれば、宮の御前、さらにさらにあるまじきことに制しうさせたまひけるを、この左京大夫殿（道長―筆者注）、その御局の人によく語らひつきたまひて、さべきにやおはしけん、睦まじうなりたまひにければ、宮も、「この君はたはやすく人にもなど言はぬ人なればあへなん」と、ゆるしきこえたまひて、さべきさまにもてなさせたまへば、わが御ころざしも思ひきこえたまふうちに、宮の御心用ゑも憚り思されて、おろかならず思されつつありわたりたまふ。土御門の姫君（倫子―筆者注）は、ただならましよりはと思せど、おほかたの御心ざまいと心のどかに、おほどかに、もの若うて、わざと何かとも思されずなん。（①一五七―八頁）

源高明の末娘明子は左遷後、同腹の兄弟盛明親王の養女として育てられ

ていたが、その後后宮詮子のもとに引き取られ、「宮の御方」として特別に扱われていた。そこに求婚者として現われたのが道隆であったが、その色好み性をきらって道長に明子を許したというのである。『栄花』は明子との結婚に先立って、倫子との結婚が成り立っていることを前提とした記述となっている。

倫子との結婚を当初父左大臣源雅信が反対したことからすれば、母穆子の婿かしづきで倫子とは仲睦まじくあっても、道長に気苦労があつて明子側へ接近したと考えられよう。しかし、すぐに彰子が誕生（永延二（六八）年）したこともあつて、明子方には終生通い婚となっていた。とはいえ、このような明子との結婚がはたして詮子の政治上の影響力とつながり得るのかという疑問もさることながら、一条天皇を説得して伊周に替り内覧を道長に獲得得たこと^{注31}などが具体的事例として想到できよう。

またこうした事情のある高貴な姫君を抱え込むことは、一条天皇膝下の政権内に無用な混乱を回避する抑止力ともなり得ようが、いかにも女方らしい配慮とすれば、道綱家にも関係がある事例に、道綱母が夫兼家と源兼忠女との間に生まれた女子を養女としたのだが、叔父の遠度が求婚してきたり、入内の噂が出たりして、その後皇太后詮子の宮の宣旨となつたらしいのである（『栄花』巻三、①一四〇頁）。となれば、道綱女豊子はどうかであつたのかということになる。

だいが後年のことになるが、彰子は既に女院となる後一条天皇（敦成親王）の御代のことで、その第一皇女の章子内親王と第二皇女の馨子内親王のそれぞれに美しく可憐な姿を見て、内の乳母として年功をつんでいまは美作三位と呼ばれる道綱女豊子が昔を回想する件りが『栄花物語』（巻三十一「殿上の花見」）にある。

美作の三位など、「またよき人あまた見たてまつれど、この御前たちのやうなるはおはしまさざりき。一条院の女二の宮、故女院におはしまししかば見たてまつりし、それぞいとをかしげにおはしまししかども、この二所の御やうには、えおはしまさず」など、けちえんに褒めまうしたまふさま、ほりかに愛敬づきたまへり。

③(二二頁)

「一条院の女二の宮」、つまり一条天皇皇后定子所生の第二皇女嬬子内親王のことだが、定子は長保二(1000)年十二月十五日、嬬子出産後、死去し、女院詮子はかねてより今度生まれた御子を引き取る考えであったように(『栄花』巻七「とりべ野」①三三七頁)、その後嬬子内親王はじめ定子の遺子敦康親王や脩子内親王もともども女院詮子のもとで養育されたのであった。掲出本文の内容が事実であったとするならば、道綱女豊子がたまたま東三条院を訪れた時、女二の宮嬬子を偶然見かけたというよりも、女房として出仕して世話などをする機会があったのかもしれない、それが「見たてまつりし」であったとすれば、道綱女豊子の初出仕が東三条院詮子のもとであったということも一つの可能性として浮上してこよう。

前記したように詮子の崩御は長保三(1001)閏十二月二十二日だから、それ以後道綱女豊子は実家に引き籠っていたこととし、寛弘五(1004)年に再出仕を道長家から促されたと考えることもできよう。これは新田氏の考えるところに近くなる。しかし、萩谷『全注釈(上)』は次のような考えを示している。

父道綱が参議に任じていた正暦二年(991)から長徳二年(996)までの間に、永延二年(968)生まれの幼い従妹の彰子に仕えて宰相の女房名を得、さらに、『権記』寛弘四年十月二十一日条に「讃岐守清通」と見える夫の官職によって

「讃岐」の名が加わり、夫の祖父朝綱が長年弁官を歴任した(左少弁八年、右中弁三年、左中弁六年、左大弁三年)縁故から、「弁」という呼び名をも得たのであろう。(八六頁)

萩谷氏は東三条院詮子のもとに初出仕したとは考えていない。つまり、道長家への初出仕の時点で父道綱の官職を根拠とする「宰相の君」に寛弘四(1007)年前後の夫清通の「讃岐守」やその祖父の弁官が新たに付け加わって「讃岐の宰相の君」とか「弁の宰相の君」とかの呼称も共存することになっているとの説明である。

それに対し、角田説を参考として前夫を参議で弁官でもあった源扶義と想定し、道綱女豊子の初出仕を東三条院詮子のもととする可能性を探っているのである。というのも、後夫となる清通との結婚や敦成親王の主乳母となる清通女である少輔乳母の継母としての立場での道長家への参仕が連動していると判断しているからである。また道綱女豊子の道長家への再出仕説は『日記』におけるもの慣れない所作や昼寝の姿を新鮮な視線で捉えるのも新参の女房に対する式部の興味関心によるところとみれば、合理的な説明がつくはずであろう。

ただ萩谷氏は豊子の年齢を夫清通や所生の定経との関係から校勘して二十九歳と推定しているのだが、それを基準とすると前夫扶義との結婚に年齢的には不都合が生じてしまうことになる。三十五歳の紫式部がどれ程度道長や倫子から信任を得ているからとはいえ、『日記』では上臈女房である「宰相の君」豊子が新参でなお年下であってこそその気安さが働いての行動が目立つという点からしてもこのような再出仕説を捨て切れないのである。ともかく国母から初めての女院として詮子の権力は表舞台である一条天

皇の皇権をも左右しかねなかったのだから、後宮の女房たちの人選に關して内裏女房は言うに及ばず、キサキたちの女房にまでその影響が及んでいたことは想像にかたくない。中宮彰子付き上臈女房でもその筆頭で中宮の御輿に陪乘した宮の宣旨にしても、源俊賢・明子兄妹にとって従兄源伊陟の娘であって、中宮権大夫俊賢の中宮への啓上の際にはその取次役であったが、『日記』には二カ所にしか記されず、萩谷朴『全注釈(下)』は「端的に言えば、紫式部は宣旨の君には必ずしも好意的ではなかったということができよう。」(一五五頁)としている。つまり詮子側の女房であったのだろう。

また三の車に小少將の君と陪乘した宮の内侍は、『権記』長保二(一〇〇〇)年二月二十五日条に「左大臣被奏云、以橘朝臣良芸子命婦為宮内侍、奏聞了」と記されている通り、中宮彰子の立后に際し、通例中宮の令旨より補されるはずの宮の内侍の件を父左大臣道長がわざわざ一条天皇に奏聞して認可を受けている。その橘良芸子おきこの割書に「院弁命婦」とあり、東三条院詮子に仕えている弁命婦という女房であることが知られる。女院詮子の女房から中宮彰子の女房へと転任したとみられるが、同年五月二十日条には院司であった行成が女院を訪れた時に「弁命婦」の呼称のまま逢っていることからすれば、詮子の意向を受けての人事であったにせよ、病悩がちの詮子への氣遣いがあったの兼任という形であったのだろうか。注(33)ともあれ、寛弘五(一〇〇六)年十一月十七日の中宮内裏還啓に際し、そのお付きの女房たちの上位に詮子没後既に七年も経つのに、なおその息のかかった女房たちが占めているというのが実状なのである。

しかし、その一方で道長の正室であり中宮彰子の母堂である鷹司殿倫子が手を拱いていることはなかった。大納言の君と小少將の君は倫子の姪で

あるし、中宮内裏還啓場面には、その名が挙げられていないが、大輔の命婦(越前守大江景理妻)は、倫子の実家左大臣源雅信家との縁故で彰子の入内(長保元九七〇年十一月一日)に従った女房であろうし、大納言の君も彰子入内時か長保二(一〇〇〇)年の立后時に、養父となった伯父時中を後見役として初出仕したのであろう。注(34)しかも、詮子の力が及ばなくなった寛弘五(一〇〇〇)年の敦成誕生に当たったの乳母選任に際しては、主乳母少輔以外にも倫子は自身の乳母子たちを積極的に登用した。藤三位基子(源高雅妻)と近江内侍美子(藤原惟憲妻)である。両者は修理亮藤原親明女で、姉妹そろって敦成親王の乳母であったことになる。

前掲した後一条天皇(敦成)の乳母子の一人である伊予守章任朝臣について『続本朝往生伝』に「但馬守源章任は、近江守高雅朝臣の第二の子なり。母は従三位藤原基子、後一条院の御乳母なり。」と記されている。注(35)後一条天皇の中宮威子(倫子腹)所生である馨子内親王が、長元四(一〇三三)年十二月十三日(左経記)に三条の章任邸に出御される時のことを、『栄花物語』(卷三十一「殿上の花見」)では次のように記す。

内の御乳母の大式の三位と聞ゆるは、殿の上鷹司殿の御乳母子なり、その人の子に、丹波守章任といふ人の家の三条なるに出でさせたまへり。

(三二六頁)

章任の母であれば基子で、「大式の三位」とすると美子となり、注(37)何らかの錯誤があるにしても、道長の正室鷹司殿倫子の乳母子であることの明示は、倫子の影響力の浸透と拡大を意味していよう。

さらに美子に關しては、長和二(一〇三三)年七月六日、道長の次女妍子(倫子腹)と三条天皇との間に禎子内親王が誕生した際に、その乳付とな

ったことが『栄花物語』（巻十一「つばみ花」）にみえる。

御乳付には、東宮の御乳母の近江の内侍を召したり。それは御乳母たちあまたさぶらふなかにも、これは殿の上の御乳母子のあまたのなかのその一人なり、大宮の内侍なりけり。

（②三～四頁）

「東宮」が敦成親王であるから、その乳母として「近江の内侍」美子が紹介されている。そして、「殿の上」つまり倫子の乳母子の一人であったことも明らかとなっている。大宮は彰子のことで長和元（1031）年二月十四日に中宮から皇太后宮に転上し、妍子が女御から中宮となっていた（日本紀略）。美子は大宮彰子の内侍となって近江内侍と呼ばれていた時期のことである。

つまり、倫子の権力の伸長基盤はあまたの乳母子たちであり、吉海直人は「倫子が彼女の乳母子達を娘腹の皇子の乳母として派遣し、後宮の実権を把握している」とまとめ、「道長の栄華を裏側（女側）から支え」た、「まさに女関白」だったとも言わしめている。^{注(38)}

しかし、『紫式部日記』に立ち返ってみると、藤三位基子・近江内侍美子両乳母は『日記』に一度も記されていず、確認したように中宮内裏還啓の搭乗車列には言うまでもなく、敦成親王誕生後の諸儀式にもその名を他史料にさえ見出すことはできないから、寛弘五（1006）年当初の乳母の選出には含まれず、その後の任命であった可能性があらう。倫子は寛弘五（1006）年十月十六日の一条天皇土御門第行幸によって、叙位に与り従一位を賜わっていた（御堂関白記）。後宮の実権掌握の必要性を感じ新たな乳母の増員をはかり、その対処に信頼のおける自身の乳母子である両者を送り込んだのだと考えられよう。

そうすると、宰相の君豊子の採用やひいては紫式部の女房採用に関して倫子の力が及ぶところであったのかどうかだが、もちろんそれはたとえ中宮彰子付きの女房であったにしても実家の後見なくして全てが成り立ちようがない時代だから、道長家のみの判断での採用がある程度可能であったと言えよう。

紫式部の道長家への初出仕を寛弘元（1004）年とし、宰相の君豊子の出仕はその後と考えている筆者にとって、紫式部が鷹司殿倫子の女房であるという所伝は有効な視座を与えてくれる。『河海抄』『料簡』に「紫式部者鷹司殿^{従一位倫子一条大臣雅信女}官女也 相繼而陪侍上東門院」とあり、『紫明抄』冒頭の「系図」の「紫式部」に注記して「従一位源倫子家女房」とされる。^{注(40)}また陽明文庫蔵伝藤原為家筆『後拾遺和歌抄』勅物に「従一位倫子家女房」と記されている。ただこれらの所伝の前後には明らかに誤伝とみられる記述もあって、鵜呑にするわけにはいくまいが、倫子が家の女房の人選に関しては、その採用権ないしは人事権の行使が可能であったこと、もっと言えば、その人事権はむしろ女方にあったのではないかとさえ思われる。深沢徹は紫式部が倫子家女房との伝承から一步退いた認識で、「影の主人としての倫子」の立場を示し、「少なくとも女房たちの品定め（人選）においては、倫子のおめがねにかなうことが不可欠の条件であったらう。」^{注(42)}（四六四頁）と述べている。

ところで、道綱女宰相君豊子の採用に関しても詮子の影響が最も気にかかる事案であったであろうことは想像にかたくない。倫子にしてみれば彰子にとっても従姉である豊子なのだから、最も信頼のおけるミウチとして取り込みたいはずで、紫式部が物語作者でありながら彰子の教育係であったように、豊子に期する関係は敦成親王の乳母（実体は乳母の母代）であり

ながら、彰子の親身なミウチとしての立場であったのだろう。その豊子に詮子方の影響があつてはならず、しかも彰子に仕える古参の詮子方上臈女房に対してはその身分・経歴上比肩する地位を有する女房獲得によって、いわば初めての倫子方上臈女房の中核的人材として要請されていたと言える。そうした特別な意図をもって倫子による女房採用であつたとは考えられないだろうか。

倫子にとっていや道長家にとっての第一皇子誕生に際しての乳母選出は絶好の機会であつた。それは男皇子誕生の確信をもって中宮大進という役職に据えていた大江清通という道長家にとって最も信頼のおける家司の娘をその乳母に抜擢しようとの準備は着々とすすめられていた。道綱女豊子と大江清通との結婚と女房採用の時点との前後は問うまいが、豊子と清通との結婚は、清通の連れ子である娘を敦成親王の乳母抜擢の大前提としてあつたのではなかったか。

紫式部から捉えた宰相の君豊子の初初しい姿や場慣れした様子が見えないうその所作から寛弘五（一〇〇六）年から遠く隔たった時点での女房採用ではないことが窺い知られよう。つまり『日記』のもう一つの意図とは、宰相の君豊子という女房をしっかりと道長家の女房として、いやそれだけではなくミウチ的立場の女房として位置付けることであつたと言えまいか。それが『日記』に他の女房を圧倒する頻出や特殊な描出となつて現われているのだと言えよう。

すなわち、『紫式部日記』は単に待ちに待った彰子の第一皇子誕生に湧く道長家の栄華を祝祭的に記録するのではなく、そこには、彰子サロンの和歌的文化性を紫式部が領導し、その主人彰子を支える内なる女房の中核に宰相の君豊子を据えることが道長の正室倫子による女房経営のあるべき

方向性として示されていると言えよう。従来ほとんど疑いもなく『紫式部日記』は道長による執筆要請として考えられていたのだが、道長ではなくその正室倫子による執筆指示だとみれば、『日記』の風景も一変しよう。

寛弘五（一〇〇六）年九月九日の「菊の綿」段（前掲（三）の省略部）における特別な激励やその歌中の「花のあるじ」の意味合い、あるいは同年十一月十七日の「中宮内裏還啓」段の直前に位置する「里居」段での帰参を促す皮肉まじりの手紙などが、倫子が紫式部に期待するがゆえの配慮や厚遇として『日記』に記されている。そのよってくる特別扱いの背景が倫子による『日記』執筆依頼の根拠として理合されてこよう。

六 おわりに

宰相の君豊子の父道綱に関して『栄花物語』（卷三「さまざまのよろこび」）は長兄道隆存命中にも拘らず、「よろづの兄君」（①一七五頁）とし、さらに卷四「みはてぬゆめ」では摂政道隆を差し置いて宰相にすぎない道綱を「よろづの兄君」（①一八七頁）と呼んで、兼家の子息の序列を破綻させてまで異腹の道綱を持ち上げ定位している。

陽明文庫蔵伝為家筆『後拾遺和歌抄』勸物に「従一位倫子家女房」とある赤染衛門のその視点は、卷十三「ゆふしで」において亡き三条院への哀傷歌として道命阿闍梨の一首のみを記しとどめる作意と呼応するならば、道綱家の人々に対する破格な対応をどう理合すべきかということになるが、『紫式部日記』対象外の卷十九「御裳ぎ」では妍子所生の禎子内親王の裳着の儀に際し、腰結は彰子が行ない、髪上役に「弁の宰相の典侍」（②三七頁）つまり豊子が召され、その贈物として調度類いっさいが下賜され、その豪華さを「かかることおのづから先々もあるなかに、こたみの御事に

御髪上の典侍の賜りたまふやうなる例はなくや」(②三三九頁)と驚きをもって書きとどめてもいる。

つまり『紫式部日記』がことさらに宰相の君豊子に焦点を当てたとする理會が妥当なのは、作者紫式部の興味関心による独断でなされた訳ではなく、道長にとって生き残った唯一の兄である道綱の存在を認め、その子女ともども道長家の発展のためにミウチとして抱え込む必要があったからで、その内輪の人的配慮からすれば、当の道長よりも正室倫子に支えられる点が多くあったということなのであろう。

注

- (1) 久下「その後の道綱」(『学苑』783、平成18(2006)年1月)。「その後」とは道綱母『蜻蛉日記』に表われる道綱以後をいう。
- (2) 角田文衛「大納言道綱の妻―宰相の君の生母と女房名をめぐって―」(『王朝の映像』東京堂出版、昭和45(1970)年)
- (3) 寛弘二、三(1005、6)年説が定説化しているが小学館新編全集『紫式部日記』の解説の中野幸一説に従う。以下本文引用も同書に拠るが、紫式部召人説に従うわけではない。
- (4) 本文「さいさ」が「さいき」の転化本文であること及びそれが道綱男である「斉祇」であることの考証は萩谷朴『紫式部日記全注釈(上)』(角川書店、昭和46(1971)年)に従う。
- (5) 萩谷『全注釈(下)』(角川書店、昭和48(1973)年)は引用を省略した箇所での小大輔の衣装を評して宰相の君への紫式部の心変わりを指摘する(四四七頁)が従えない。この場面の作者の精神を分析した秋山虔「紫式部の思考と文体(一)(二)」(『源氏物語の世界』東京大学出版会、昭和39(1964)年)がある。
- (6) 寛弘六(1009)年十月五日一条院内裏は焼亡(日本紀略、御堂関白記)し、

同年十月十九日道長造宮の枇杷殿に遷御した。

- (7) 『古事談』(一―二八)『続古事談』(二―一六)には舞で落冠した道綱を顕光が嘲けたので、道綱は「妻をば人にながれて」との暴言を吐き非難される。この妻というのが左大臣源雅信女で道長の北の方倫子の同腹の妹であり、なお兼経の母であるらしく、道長・倫子夫妻の強力なすすめで道綱の妻となったという因縁が二人の間にはある。

- (8) 寛弘六(1009)年の実録的記事の欠落は、紫式部が何らかの事情で書けなかったのか、それともあえて書かなかったのか、両者の疑問に答える事由を想定できなければ充分でない。従来同年二月に伊周方の彰子・敦成への呪詛が発覚したことを原因とする説が有力であったり、また個別には藤村潔「紫式部日記の形態試論」(『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』24、昭和62(1987)年1月。のち『源氏学序説』笠間書院、昭和62(1987)年)は六年正月から七年正月までの間は『源氏物語』続篇の執筆に没頭したため空白になっていたのが本来の形態だと推定している。それに對し拙論「宇治十帖の執筆契機―繰り返される意図―」(『考えるシリーズⅡ知の挑発②『源氏物語』の方法を考える―史実の回路』武蔵野書院、平成27(2015)年。のち『源氏物語の記憶―時代との交差』武蔵野書院、近刊)は、具平親王女隆姫と頼通との婚儀及び宮の薨去とに関わる事象を指摘する。

- (9) この「讃岐」の本文は道綱女豊子の夫大江清通が讃岐守であったゆえ、その注記が本文に混入したとみる。

- (10) 『御堂関白記』同日条に「大納言陪膳」とある。ここは『日記』の通り「大納言の君」とすべきで、「大納言」を道綱とする『大日本古記録』(第二刷以降)の傍記は誤りとする指摘は、山中裕編『御堂関白記全注釈 寛弘五年』(思文閣出版、平成19(2007)年)にある。

- (11) 寛弘五(1008)年十月十六日の土御門邸行幸時にも道綱が一条天皇の陪膳を務めていることが『御堂関白記』『小右記』で知られる。『紫式部日記』

には同日に東宮傳道綱の存在さえ記されていない。

- (12) 久保朝孝「『紫式部日記』敦成・敦良両親王御五十日祝宴記事の比較」『源氏物語とその前後』桜楓社、昭和61（一九八六）年。同氏は「敦成親王・敦良親王に関するそれぞれの記事が両々相俟って初めて完璧性を保持し得るのである。」とも言っているが、本稿は叙述視点の動態を言う点、異なる。また管絃の宴の有無も天皇の出御に関わるとなると私的・公的の規定は流動的ではなくなるか。
- (13) 「弁の宰相の君」に豊子以外の別人を想定することも可能な異称だが、いまは同一人物として論を進める。この呼称に関しては後述する。
- (14) 福家俊幸「『紫式部日記』における三人の女房についての一考察―宰相の君・大納言の君・小少将の君をめぐる記述を中心に―」（『中古文学論攷』9、昭和63（一九八八）年12月。のち『紫式部日記の表現世界と方法』武蔵野書院、平成18（二〇〇六）年）。以下福家説は同書に拠る。
- (15) 前掲久保論考に指摘がある。
- (16) 『日本紀略』永祚元（九六二）年三月二十四日条に「入道従三位藤原遠度薨。号北野三位。」とある。遠度は九条家師輔の六男で、道綱の叔父に当たり、『蜻蛉日記』では道綱母が養女とした源兼忠女に求婚したりする。またその遠度には二人の娘がいて、その姉が三巻本『枕草子』第百段に登場する中宮定子の妹淑景舎原子付き女房の「北野宰相のむすめ宰相の君」とし、また『栄花物語』（巻五「浦々の別」）に定子所生第一皇女脩子内親王の乳母として参上した「北野の三位とてもものしたまひし人の御女」（①二七三頁）もその遠度女とする考えを示す新田孝子『栄花物語の乳母の系譜』（『風間書房、平成15（二〇〇三）年）がある。なお前掲福家論考に宰相の君の登場回数を十六回としてあるのは当然この遠度女を除外している。
- (17) 小野宮家の実資に関しては父為時以来好意をもった接触があり、紫式部は『小右記』長和二（二二二）年五月二十五日条では皇太后宮彰子への啓上の

取次役を勤めていたことが知られる。

- (18) 西本願寺本系統『兼盛集』末尾に付載される十二首の佚名家集は従来定頼とか頼宗との説があったが、宰相の君豊子の歌集とする森本元子「西本願寺本兼盛集付載の佚名家集―その性格と作者―」（『和歌文学研究』34、昭和51（一九七六）年3月。のち『古典文学論考』新典社、平成元（一九八九）年）に従う。
- (19) 『枕草子』の漢詩的世界を見据えてのことであろう。前掲の公任の戯れに「わが紫」とあったゆえ「藤式部」を「紫式部」とするあだ名命名に関わること萩谷『全注釈上』（四八〇―三頁）に賛する。萩谷氏の言う如くここに清少納言のあだ名命名との関連性が浮上すれば、本稿にとっても有効な視座となろう。
- (20) 萩谷『全注釈上』（四九三頁）が言う紫式部が召人であるがゆえの嫉妬で倫子が席を立てて去ったという理会はしない。山本淳子『紫式部日記と王朝貴族社会』（和泉書院、平成28（二〇一六）年）「倫子の不愉快―『紫式部日記』五十日の祝い―」に従う。
- (21) 増田繁夫「紫式部と中宮彰子の女房たち―中宮女房の職制―」（『南波浩編『紫式部の方法』笠間書院、平成14（二〇〇二）年）
- (22) 『権記』寛弘四（一〇〇七）年十月二十一日条に「参左府、依御物忌、御讃岐守清通宅也」とある。
- (23) 角田文衛『王朝の明暗』（東京堂、昭和52（一九七七）年）「後一条天皇の乳母たち」に豊子の先夫の候補として長徳四（九六八）年七月に四十七歳で卒した参議、正四位下、左大弁の源扶義を挙げる。史料的な裏付けはなく、また大納言の君との関係も考えなくてはならず候補者としていちおう考えに入れておく。
- (24) 前掲増田論考は長元四（一〇三三）年に典侍を辞した芳子の妹善子とする。
- (25) 前掲「後一条天皇の乳母たち」
- (26) 行成『権記』長保二（一〇〇〇）年の記には菅原輔正とともに行事蔵人である

孝標の名が記され、特に同年十月六、七日条には皇后定子の御産の際の修法料とか調度類の手配が命ぜられている。なお後年『更級日記』の作者の乳母志向にも微妙に影を落としているのかもしれない。

- (27) 齊信の権中納言への昇進は同じ参議であった藤原懷平、菅原輔正、藤原誠信らを超えたものであった。道長方の力が働いていたものと考えられる。

なお大江清通も彰子立后時に中宮大進に任ぜられている。

- (28) 福家前掲書「むまの中将(一)(二)」

- (29) 福家氏は公任が敦成親王五十日の祝儀の酒席で「わがむらさき」と式部に戯れかけたことを、公任の若き日の昭平親王女との恋に近似していることから、自分が光源氏のモデルだとする読みに基づく発話と理会した金田元彦『源氏物語私記』(風間書房、平成元(一九九〇)年)を紹介している。

- (30) 清水好子『源氏物語論』(塙書房、昭和41(一九六六)年)は、高明歌が『後撰集』『拾遺集』には採択されなかったが、『後拾遺集』に十首採歌され、しかも九首が恋の部にあることに着目し、そこに高明を色好みとするような『後拾遺集』撰者の独特な解釈があるとしてそれを『源氏物語』の影響とする。

- (31) 長徳元(九五)年五月十一日、藤原道長に内覧の宣旨を賜う(朝野群載七)。

- (32) 正暦二(九二)年九月十六日、皇太后藤原詮子出家、女院号を定め東三条院とする(日本紀略)。

- (33) 増田繁夫前掲論考。

- (34) 萩谷『全注釈』二〇〇頁。但し『栄花物語』(巻八「はつはな」と矛盾するが、源時中はこの時期大納言であった。

- (35) 引用は日本思想大系7『往生伝 法華験記』(岩波書店)に拠る。

- (36) 『日本紀略』長元四(一〇三三)年十二月十六日条には「卜定賀茂斎王第二馨子内親王卜食。去十三日。遷座丹波守章任三条宅。」とある。

- (37) 杉崎重遠「後一条天皇の御乳母大式三位」(『王朝歌人伝の研究』新典社、昭和61(一九八六)年)。なお前掲五人の乳母子のうち美子は「前丹後守憲房」の

母となる。但し基子・美子を姉妹とし両者ともに天皇の乳母とする点に疑義がないわけではない。

- (38) 吉海直人「『御堂関白記』における「女方」について―道長と倫子の二人三脚―」(『解釈』平成4(一九九二)年2月)

- (39) 吉海直人『平安朝の乳母達』(世界思想社、平成7(一九九五)年)「『栄花物語』の乳母達」

- (40) 引用は玉上琢彌編『紫明抄 河海抄』(角川書店)に拠る。

- (41) 陽明叢書2『後拾遺和歌集』(思文閣出版、昭和52(一九七七)年)。因に和泉式部は「上東門院女房」とある。

- (42) 深沢徹「紫式部、「倫子女房説」をめぐって―即自的存在者(外なる他者)と対目的意識(内なる他者)の挟間で―」(南波浩編『紫式部の方法』笠間書院、平成14(二〇〇二)年)

- (43) 原田敦子『紫式部日記 紫式部集論考』(笠間書院、平成18(二〇〇六)年)「紫式部日記の始発―道長家栄華の記録」等。

(くげ ひろとし 日本語日本文学科)